

審 査 結 果 の 要 旨

論文題目「ステント留置後の新生動脈硬化病変”Neoatherosclerosis”についての検討」

学位申請者 中澤 学

本博士論文は、経皮的血管形成術としてスタンダードになりつつある薬剤溶出ステント（DES）の遅発性ステント血栓症発生の原因となる新生粥状硬化病変について剖検例 229 例 406 病変の病理学的改正を試みた研究である。申請者中澤 学がこの研究を進めた CV Path Institute は冠動脈硬化病変解析では世界でも指折りの施設で、Corresponding author の Prof. Renu Virmani を始めとした有名な研究者・臨床家によって先進的な研究が展開されている。申請者が筆頭著者として発表している Circulation、JACC などに発表された論文において、“Neoatherosclerosis”という造語を作り出し病態解明を試みるなど、循環器病学の論文として大変意義のある研究として仕上がっている。また本研究の内容は、DES 治療優位の学域の中にあって、乱用の病理学的な警鐘を鳴らす社会的意味合いも含まれている。

研究内容のプレゼンは、現時点での臨床および科学的背景をよどみなく分かりやすく説明し、研究内容も良くまとめられていたと考える。

審査会内で、以下の質疑が交わされた。

- 1) 第 2 世代 DES におけるイベント発生率の減少に反して、新生粥状病変の発生に変化がないことへの矛盾点、
- 2) 新生粥状効果に対する薬物治療の可能性について、
- 3) Neoatherosclerosis に対する「新生動脈硬化」という和訳は適切ではなく、新生粥状硬化が適切ではないか？
- 4) 結論にある数点の考察に関しての支持する結果が不明瞭である。
- 5) Neoatherosclerosis の病理学的な定義に対する説明の確認。

これらの質問に対して本申請者は、研究遂行によって得られた十分な成果と深い文献的知識とを駆使して活発な議論を行い、本研究の限界と今後の研究の必要性も十分に理解した上で、的確かつ詳細な答弁を行った。また質疑応答を通じて、臨床循環器学における病理学的研究の重要性が認識され、今後の研究活動・臨床活動が期待された。

以上の結果、本論文は学位論文として十分な内容を有するものと審査委員全員の一致で判定された。したがって、申請者 中澤 学 は東海大学博士（医学）の学位を授与されるに値すると判断した。

論文審査委員

主査	博士（医学）	浅原 孝之	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	医学博士	盛 英三	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	医学博士	中村 雅登	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	博士（医学）	後藤 信哉	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）
委員	博士（医学）	小林 義典	医学部教授	（医学研究科先端医科学専攻）